

## 〈資料紹介〉『若楓東雛形』

山 田 和 人

書誌

種類 草双紙（竹田からくり絵画資料）

寸法 縦一八・四糎 横一三・〇糎。

冊数 上中下、三冊（一冊に合綴）。

丁数 一五丁。

丁付 柱刻に「竹田」とあり、丁付を「一〜十五」まで記す。

形態 中本。袋綴じ。

題簽 元題簽。

題簽寸法、縦一四・五糎 横八・〇糎。中之巻の元題簽がある（後述）。

刊年 明和四年（一七五七）七月。

所蔵 東京都立中央図書館。

分類番号 「加賀文庫6047」

備考 本書には、表紙見返しに「東京都立日比谷図書館 昭和2

8・1・10 099504」の印記がある。また、「北尾重政筆、これは黄表紙に擬せる／竹田近江のからくりの絵尽し也 多く類本を見ざる大珍本也」と朱筆された付箋がある。

なお、題簽は元題簽であるが、上中下、三冊のうちの中之巻の題簽が残っている。題簽の絵は、九才の「神託木綿襷」であり、本来、この題簽は六才の前に入るべきであり、題簽中には㊦と記されており、この題簽が中之巻のそれであることを示している。上之巻と下之巻の題簽は残念ながら存しない。

刊年については、子供役者が、明和四年閏九月竹田近江大掾藤原清一の番付や、明和五年正月刊の役者評判記『役者党紫選』と一致するので、明和四年と推定される。なお、本書表紙見返しの口上文によれば『機関千種の実生』が三月、『若楓東雛形』が七月の興行

であることが確認できる（口上文は後掲）。

資料紹介にあたって、本絵尽しの画像を先に掲げ、後半に翻刻を掲載した。絵尽しの場合、絵と本文を一体のものとして理解すべきであるので、画像中の本文に近い位置に翻刻本文を配置することにした。翻刻に際して、現在通行の字体としたが、一部旧字をそのまま残したこともあることを断っておきたい。翻刻本文の後に、参考までに簡単な演目解説を付した。

最後に、本資料の掲載許可を認めていただいた東京都立中央図書館に感謝申し上げます。



(表紙)



(10)



(2オ)



(1ウ)

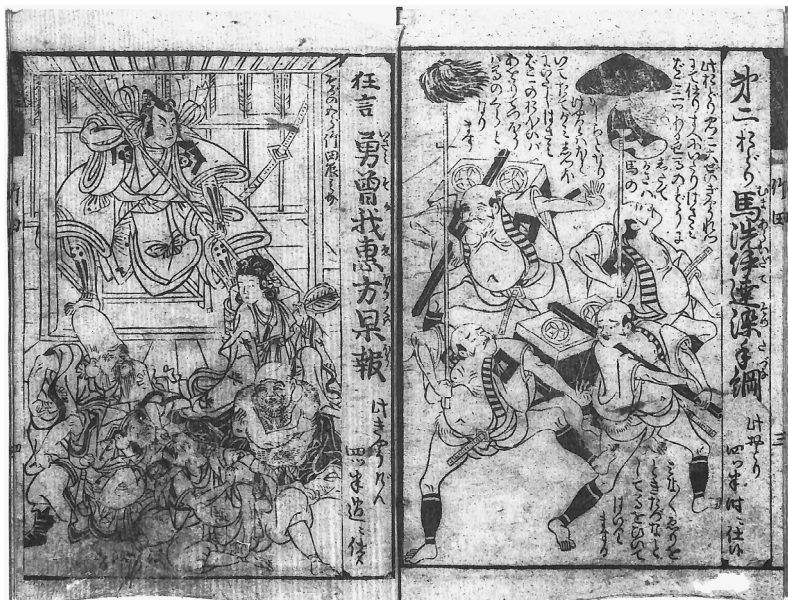


(3オ)



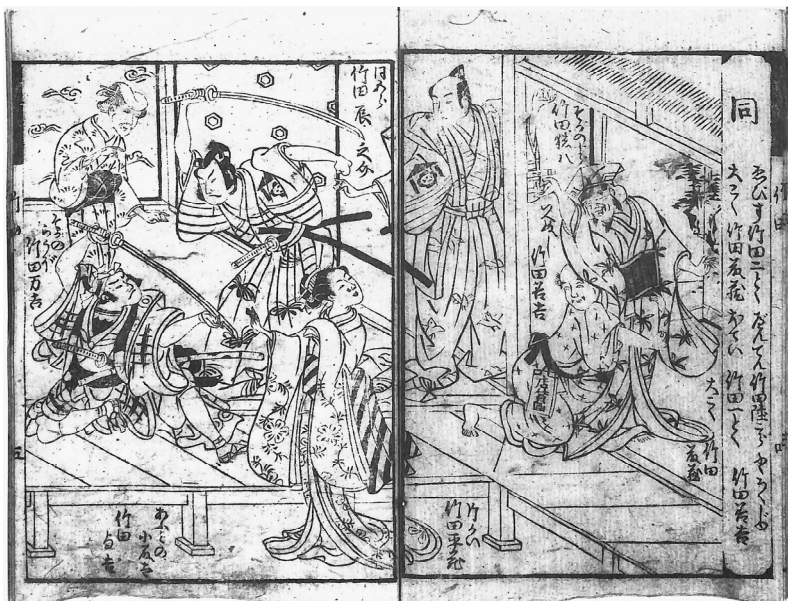
(2ウ)





(4オ)

(3ウ)



(5オ)

(4ウ)



(6オ)



(5ウ)



(7オ)



(6ウ)





(8オ)



(7ウ)



(9オ)



(8ウ)



(10オ)



(9ウ)

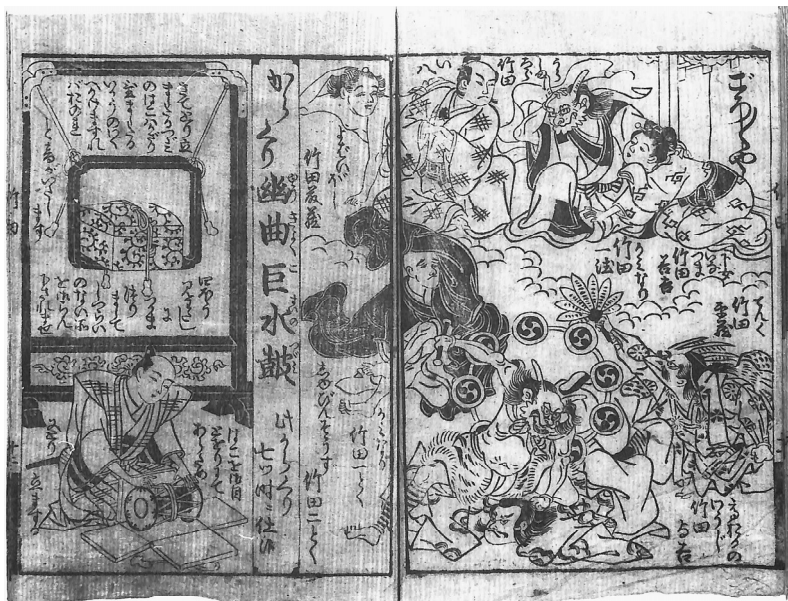


(11オ)



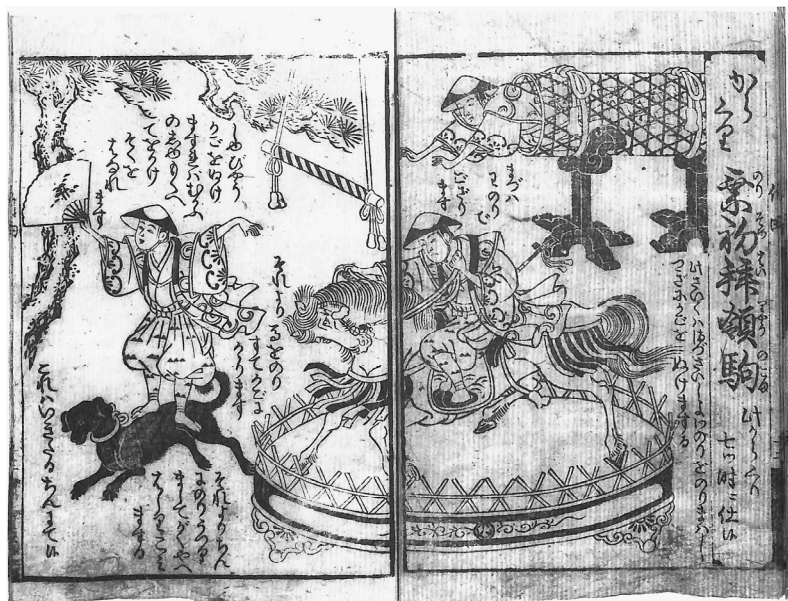
(10ウ)





(12オ)

(11ウ)



(13オ)

(12ウ)



(14オ)



(13ウ)

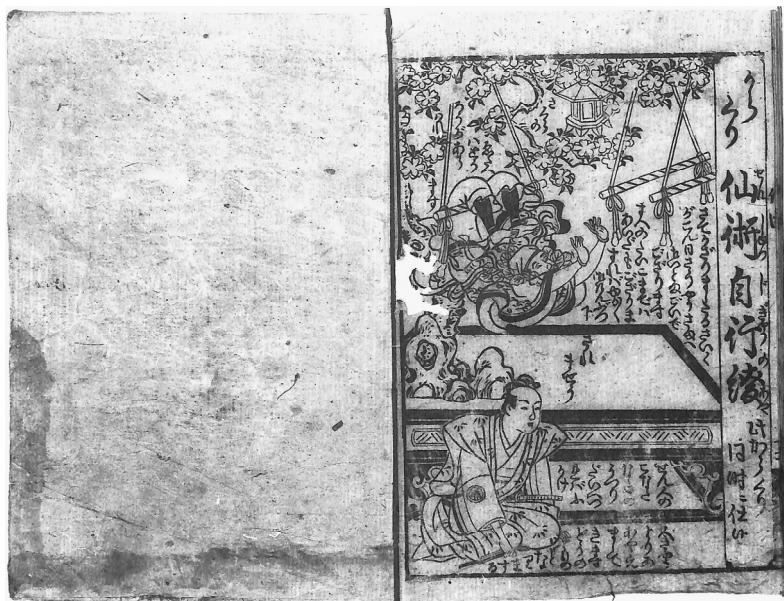


(15オ)

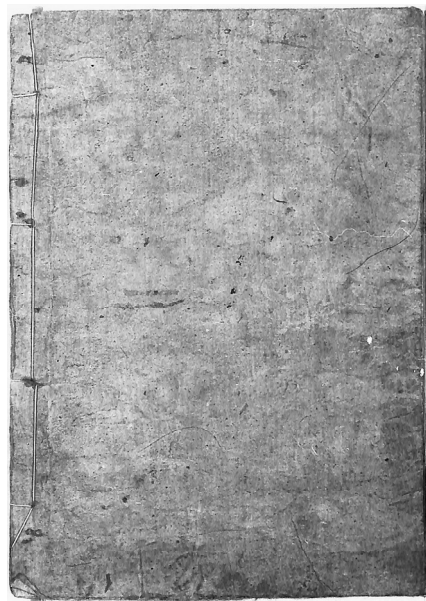


(14ウ)





(15ウ)



(裏表紙)



(表紙)



(1オ)





(1ウ)



(2才)



(2ウ)

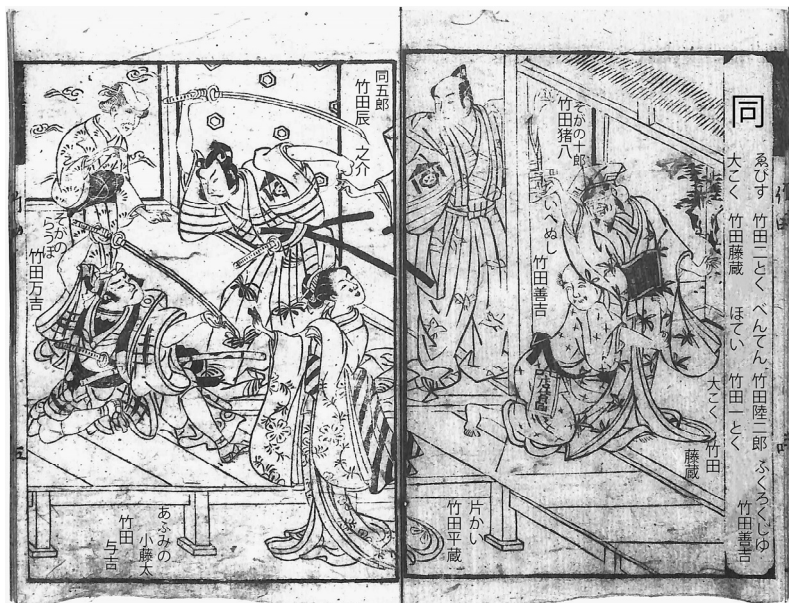


(3才)



(4オ)

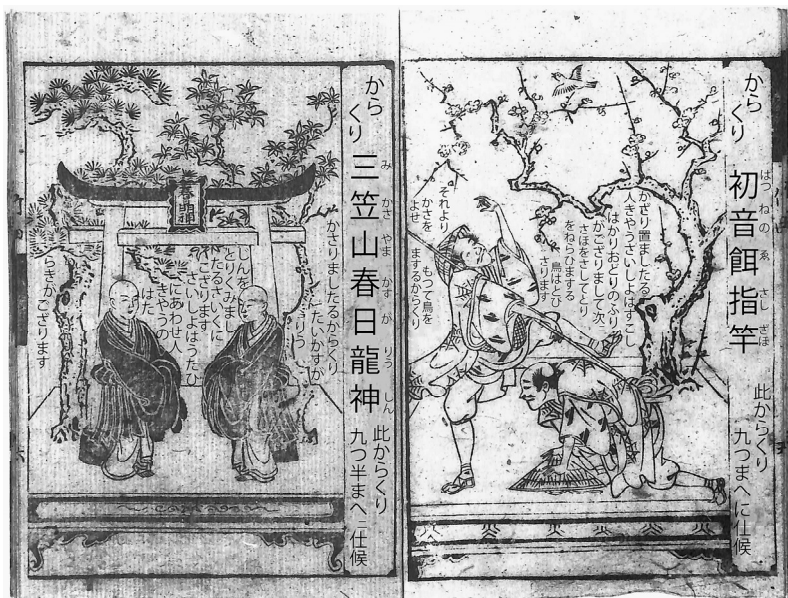
(3ウ)



(5オ)

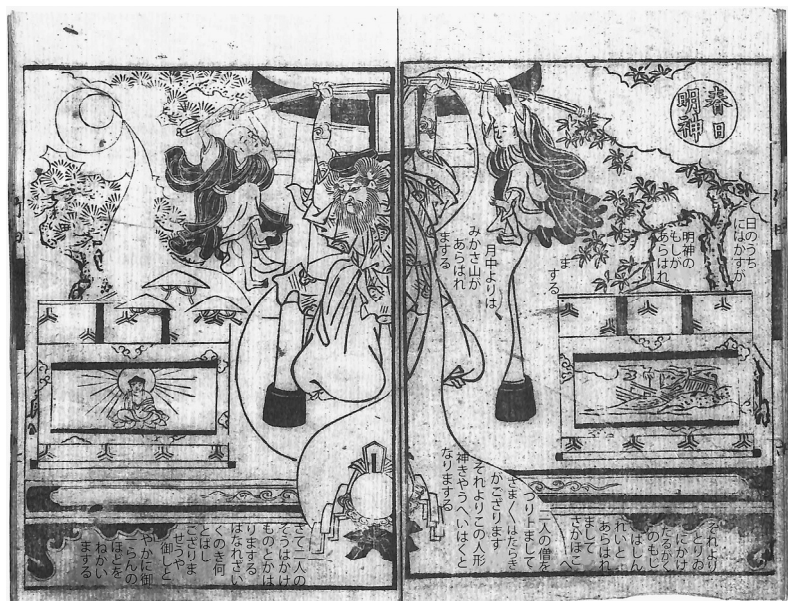
(4ウ)





(6才)

(5ウ)



(7才)

(6ウ)













(14オ)



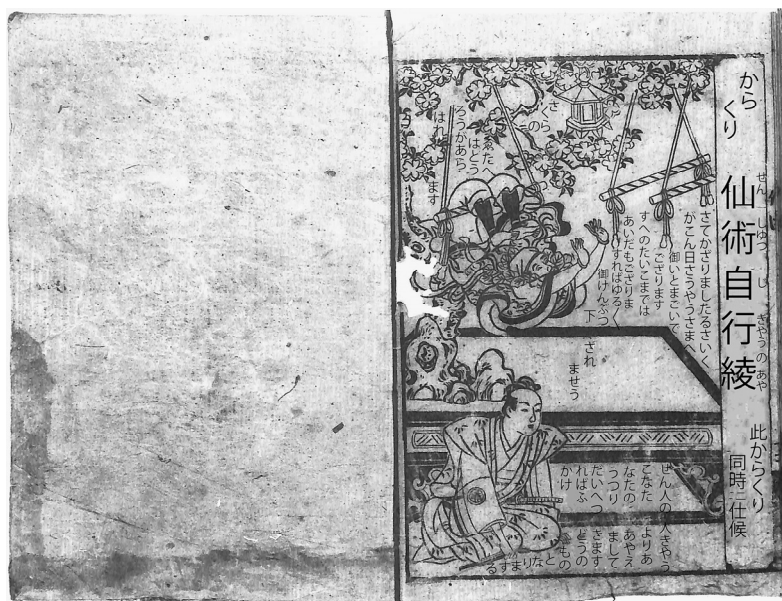
(13ウ)



(15オ)



(14ウ)



(15ウ)



## 演目解説

## 第一 地狂言 備前長光（一ウ）

大名と目代の前で、家宝の備前長船長光の名刀を盗人勘六に奪われ、小姓才二郎がそれを取り戻そうとする場面のようなのだが、詳細は不明である。『竹田新からくり』（国立国会図書館）にも「地狂言 備前長光」として収載されている。

## 狂言 高倉宮妹背扇巫女（二オ）

詳細は不明だが、三場面が描かれており、出羽判官と井出の庄司のやり取り、庄司の娘松姫と介太夫の滑稽な濡れ、長谷部長兵衛が美しい巫女の舞の太鼓を打つ場面がある。おそらく、この巫女舞の艶やかな踊りが見せ場だったのだろう。

## からくり 吹矢難波扇（二ウ）

台の上の童子の人形が、片手に吹き矢筒を持ち、もう片方の手で矢台から吹き矢を摘んで筒に入れ、体をひねってねらいをつける。そして、扇を吹き落したり、鎧に命中させて鎧を神社のミニチュアに変身させたり、蠟燭の芯を吹き切ったりした。吹き消した蠟燭の燭台が朝顔行灯に変わり、その後ひとりでに灯がともる。『竹田新

からくり』（国立国会図書館）に「吹矢的なには扇」、「家土産竹の林」に「吹矢」などとして収載されている。

## からくり 秘曲棒ざらし（三オ）

大坂にいた「かしぼうの一曲」という力持ちの芸をからくりにしたもの。からくり台に乗った力持ちの人形が棒を持っており、その先端では布晒しの人形が両手に持った長い布を勢いよく振る。これは、最初は、上の人形がからくり台から離れて棒の先端で足を固定し、片足をあげて布を晒す動作をする。下の力持ちの人形は、足駄で拍子を踏み、体を縮めて片手で棒の下を握って立ち上がり、拍子を踏んで布を晒させる。次に、下の人形が仰向けに反り返って、片足の指に棒の下端を固定し、もう一方の足で拍子を踏む。下の人形は立ち上がったたり、座ったりという動作を行うが、棒を持っていない方の片手で扇を上下させる動作をする。すべて離れ物のからくりである。『竹田新からくり』（国立国会図書館）「曲曝浪花男」、「機関千種の実生」（東京都立中央図書館）「秘曲棒晒」などにも収載されている。

## 第二 おどり 馬洗伊達染手綱（三ウ）

まず、奴の大鳥毛踊りがあり、その後、大名行列の立道具で神馬

を作り、奴が舎人の姿になって段だらの手綱を引く。『機関竹の林』(国立国会図書館)には「舎人馬段染手綱」、「機関千種の実生」(東京都立中央図書館)には「馬洗伊達染手綱」として同内容の踊りが所収されている。本書には、手綱について奴の半纏の襟を解いて手綱とするとあり、この記述によって段だら模様の手綱の意味がはっきりする。

狂言 勇曾我恵方果報(四オ)(四ウ)(五オ)

「矢の根」の曾我五郎の前に七福神が勢揃いする。曾我五郎が工藤祐経の家臣近江小藤太に斬りかかる。十郎と老母がその様子を見守る。また、次の場面の詳細は不明だが、七福神のうちの大黒が女装して娘片かいに近づこうとし、家主は大黒にすぎるといふ滑稽な見せ場か。

からくり 初音餌指竿(五ウ)

鳥刺の人形が踊りの所作をして、次に竿を刺して鳥を狙うが鳥は飛び去ってしまう。その後、笠で鳥を寄せる所作をする。番付(東京大学総合図書館霞亭文庫)にも「福梅枝笑顔鳥差」として収載されている。

からくり 三笠山春日龍神(六オ)(六ウ)(七オ)

梅尾(とがのお)の明恵上人(みょうえしようにん)と笠置(かさぎ)の解脱上人(げだつしようにん)が春日明神の鳥居前でいろいろと所作をする。やがて、鳥居の額から春日の神勅時風の臣が現れ、時風の臣のもつ天の鉾(あまのとほこ)に両僧を取りつかせてそれぞれの台に移す。時風は幣帛となり飛び去る。両僧は掛け物に変化する。掛け物に描かれた伽藍に灯がともったり、三尊五智(さんぞんごち)の如来が現れたりする。三日月が三つの笠のかたちとなり、満月のうちには春日明神の文字が現れる。その後、からくり台が変わって、春日竜神のからくりとなる。波間から龍神があらわれ、松に上り、黒雲に移って、春日灯籠に竜灯をとます。四つのからくり台を使った離れ物のからくりである。絵尽し『出羽大書院』(国立国会図書館)他にも収載されている。

第三 おどり 京人形(七ウ)

人形を買いに出た女中がいろいろ珍しくおもしろい踊りを演じる変化舞踊。また、香箱の中から、大津絵の画題の瓢箪鯉やヤジロベエ、達磨のおきあがりこぼし等の人形が自ずと現れる。



狂言 伊勢や日向の物語（八オ）（八ウ）

伊勢の国の与茂四郎と日向の国の平介が閻魔の廳に引き出されるが、剽軽な様子である。与茂四郎は赤羽根半内と立ち会い、おそらくその立ち会いで斬られたのであろう。やがて、与茂四郎は幽霊となって現れるが、実の女房おべたには見向きもせず、平介の女房しかまに言い寄る滑稽な場面となる。

からくり 神託木綿襷（九オ）

幣帛を両手に持った神官の人形が棒の上を行きつ戻りつして、その後、膝を棒にかけてぶら下がり、下にある台に降りると、人形がたちまち神鏡幣帛に変わる、綾渡りの離れからくり。

からくり 乱曲獅子遊（九ウ）（十オ）

小僧のささらに合わせて獅子舞（獅子頭をかぶって行う舞）が狂い舞う。その後、獅子舞は別のからくり台の岩山へと飛び移り、狂い舞う。獅子舞の衣裳の中から前足と後足の役の小僧が姿を表わし、岩の上でしばらく休み、また舞い狂う。松の枝に提灯が下がってくる。

第四 おどり 御影堂（十ウ）

扇にて女性の踊り手が扇を巧みに持って踊りながら、さまざまな作り物を見せる。扇の丸や富士の山、最後に帆掛け船となる。

狂言 惚浦島天井返（十一オ）（十一ウ）（十二オ）続きにからくり

浦島太郎がうなぎに取り付いて天井に上っていくのを、融大臣とその近習が見上げる。天上した浦島が雷や下女稲妻、夜這い星と遭遇したり、高岳皇子が雷に、守敏僧都が天狗に、それぞれ懲らしめられる展開の様子が描かれる。

からくり 幽曲巨水鼓（十二オ）

衣桁（衣服をかけておく台）の枠に、鼓の箱を掛けておくと、ひとりでに音が鳴るからくり。箱の中に仕掛けのないことを見せるために鼓の箱を分解して見せる。「竹田大からくり双六」（東京国立博物館）に「天鼓雲籠閣」として収載されている。

からくり 乗初拝領駒（十二ウ）（十三オ）

曲馬（馬の曲乗り）のからくり。最初は、乗り手が鞭を当てて地道を走り曲乗りをして、鞍に片足で立ったりして輪乗り（輪形に馬を乗りこなす）をする。次に、馬を乗り捨て、乗り手が箆抜け（長

い筒上の箆を飛んで抜ける」をする。その後、乗り手の人形が箆の向こうの綾棒に取り付き、生きている犬に跨がり楽屋へと走ってゆく。すべて離れ物のからくりである。『竹田新からくり』（国立国会図書館）に「拝領曲馬乗始」、「機関竹の林」に「乗初拝領駒」他として収載されている。

#### 第五 狂言 大塔宮蟻鑑（十三ウ）（十四オ）（十四ウ）

『大塔宮蟻鑑』の第四「関所の段」では芋が瀬庄司が関所で大塔宮一行を引き留める。平賀の三郎と赤松則祐らは勇むが、命には替えられぬと錦の御旗を渡す。後に駆けつけた村上彦四郎の働きによって、錦の御旗を取り戻す。この場面を人形振りで見せるのが趣向で、人形も人形遣いも竹田の子供役者が演じる。「兵衛館の段」では、大塔宮の寝所に忍んできた戸野の兵衛の娘呉羽と兄大弥太の妻蓬生が鉢合わせをして宮に取りつくが実はそれは大塔宮ではなく戸野の兵衛であった。兵衛と蓬生は宮を逃がそうと策をめぐらせ、蓬生は山伏姿となって大塔宮の身替りになろうとしていた。兵衛は大塔宮、呉羽、蓬生を逃がすために藤棚に登らせ匿う。そこに帰ってきた大弥太と兵衛が斬り合いになり、大塔宮一行ともに奮戦する。

#### からくり 幼稚智恵海（十五オ）

からくり台の上の童子の人形が、年齢を身振りで答えたり、笛を渡すとそれを吹いたり、でんでん太鼓で遊んだりして、その後、身震いして小便をするからくり。『竹田新からくり』に「萬歳稚大力」として収載されている。

#### からくり 仙術自行綾（十五ウ）

仙人の人形が桜の枝に吊した綾棒を次々と渡っていき、最後に人形が不動明王の掛け物に変わり、桜の枝には灯籠が現れ、おそらく点灯して終わるのであろう。番付（日本大学図書館）にも収載されている。